

「大きな喜びをあなたに」

ルカによる福音書 2章 1節～14節

説 教 本庄侑子牧師

約二千年前、この地上に救い主がお生まれになりました。今では世界の至る所で、クリスマスには家族や友達が集まって、美味しいものを食べ、プレゼントを交換し、嬉しい楽しい時間を過ごします。しかし、聖書が描く最初のクリスマスは、そのような嬉しい楽しいものではなく、むしろ悲惨なものでした。神の子、救い主は家畜小屋の飼葉おけの中にお生まれになったのです。

「客間には彼らのいる余地がなかった」(7節) 120キロもの長旅の末、ようやくたどり着いた故郷で、一組の夫婦を待ち受けていたのは冷たい現実でした。皇帝の勅令によって、出産を目前に控えた身重のマリヤとその夫ヨセフは、ベツレヘムへ向かわなければなりません。イエス・キリストの両親として選ばれたこの若い夫婦は、望まぬ長旅の末、出産に必要なものが一つもない不潔な場所で赤ちゃんを産み落とさなくてはなりません。出産を前にして、マリヤは生まれてくる赤ちゃんのために、夫のヨセフも愛する人のために、何とかして安全な環境を整えようと手を尽くしたと思います。けれども、家畜のえさを入れるための飼葉おけをやっとの思いで見つけて、赤ちゃんを寝かせるだけで精一杯でした。

どんなにがんばっても力が及ばない、どんなに愛していても必要なものを与えることが出来ない。マリヤもヨセフも、それぞれに自分の無力さに向き合いながら、飼葉おけに生まれた赤ちゃんを見ることとなりました。疲れきった心と身体で、空しさに胸を震わせながら、辛い現実をただ見ることしか出来ませんでした。

徴税に必要な人口調査のために、故郷へ帰ることを皇帝に命じられた多くの人々が、不満や憤りを抱えながらも、黙々と旅に出るしかありませんでした。お腹が大きい、しかも13、4歳ぐらいの少女であったと言われるマリヤに気付いて、思いやりを示す心の余裕すら誰にもありませんでした。

「客間には彼らのいる余地がなかった」(7節) この言葉はまさに、この世界の現実です。自分のことだけで精一杯で、そのことを悲しむよりは、そうなるのも仕方ないと開き直って、諦めてしまう私たちは、家畜小屋に追いやられ、それでもそこで生きていくために精一杯努力をし、

やっとの思いで得た飼葉おけに赤ちゃんを仕方なく寝かせて、そこに立ち尽くしながらもお、人生を続けてきたのです。聖書が伝えるクリスマスは、美しいおとぎ話ではありません。この世界を生きる私たちの現実です。

さらに聖書は、町から遠く離れた野原で黙々と羊の番をする羊飼たち、人口調査の対象として数えることもされなかった人々を描き出します。彼らには人としての尊厳も無く、夜通し休み無く働かされ続けて辛く惨めでしたが、生きていくためには、そこに留まらなくてはなりません。これもまた、私たちの現実です。

マリヤとヨセフが身を置いた家畜小屋は、私たちが生きてきたこの世界でした。そして、羊飼たちの夜は、私たちがそれぞれに抱えてきた人生そのものなのです。

しかし、神様がお与えくださった救い主は、この悪臭漂う家畜小屋の飼葉おけの中にお生まれになりました。そして主の御使は、この羊飼いの夜に現れたのです。救い主のしるしは、この世離れた出来事の中ではなく、私たちが抱えるこの世の現実の中に与えられました。

神は私たちが愛されました。この世に独り子イエスキリストを送って、私たちの罪を全て代わりに背負わせ、十字架につけて殺すほどに愛されました。そして、三日目に復活させ、新しい命に解き放つ道をこの世に開いて下さいました。神は、私たちがこの世にあって、喜びをもって生きようようになることを決して諦めませんでした。神の独り子が飼葉おけの中に生まれたとはそういうことです。

羊飼いたちの夜に、まばゆい光が天から照らされた時、おびただしい天の軍勢が現れ、御使と一緒に神を賛美しました。賛美歌は、美しいとは言えない世界の現実の中で、自分に与えられた人生を引き受けて、なお喜び、天に向かって歌う歌です。ヨセフとマリヤが追いやられた家畜小屋、苦難と悩みに満ちた私たちが生きているこの世界に、私たちのために十字架についてくださった神の子がおられる、この大きな喜びがあるからです。

(記 説教要約奉仕者)